

雑草を抜かない抵抗



大阪大学大学院経済学研究科 深尾葉子

陝西省北部、榆林市一帯は、北にモウス砂漠、南に黄土高原が交差するエコトーンである。解放後、政府と民間との協力が功を奏し、この地域は「人進沙退」（植林などの活動が砂漠化の勢いを凌駕すること）に成功した。近年は「西部大開発」政策のもと、榆林市一帯に広がる炭田や油田の開発が急ピッチで進められ、砂漠が次々に都市へと姿を変えつつある。

また、迫りくる砂漠、乾燥した大地、侵食の進む黄土高原、といった



上 2007年雑草を抜かない抵抗をはじめて1年目。写真の左を歩く男性がこの土地を請け負って緑化を行っている地元の交通警察官、申さん。すでに全体が草で覆われている。右奥の山は、通常の植林地。手前と同じ時に植林したものだが、雑草を刈り続けているため、山肌が黄色く見えている。

下 2009年山全体が草でびっしりと覆われ、植樹された木々も旺盛に伸びている。沢山の蝶や鳥が舞い、草や木のおいが充満していた。

外観とはうらはらに、この地域は、きわめて多様な植生と、自然の旺盛な回復力に恵まれた地域でもある。我々は黄土高原が、少ない雨量とは対照的に、朝夕の温度差によって、植生が少しでもあるところにはきわめて豊富な結露による水分補給があること、それによって土壌表面にはしばしば「コケ類」がびっしりと繁茂していることを、長期滞在の中で観察してきた。黄土高原の大地は人的かく乱がなければ、驚くほど急速に、こうしたコケ類や地衣類によって表面が覆われ、それが「結皮」という土壌皮膜を作り出す。すこしばかりの水分をもとにオリゴ糖の粘性成分によって構成される「結皮」が形成されると、やがてそれを栄養分として、さまざまな雑草が繁茂し、黄土の表面は多様な植生にぎっしりと覆われた草原が形成される。さらに数年たつとそこに灌木や低草木が繁茂し、もはや開墾するのも難しい状態となる。黄土が春先に黄砂を巻き上げる状態に維持されているのは、人間がくまなく耕し、また年間を通じてヤギの放牧などで植生が食い尽くされ、土壌表面がヒズメで不断にあらされているからである。

ある夏の日、ハマビシと呼ばれる薬草にもなる雑草の茎を持ち上げてみると、照りつける炎天下、茎が地を這っている部分にだけ水分が保持されて、しっ

りと湿っていた。これをきっかけに、我々は黄土高原の耕作遺棄された耕地を請け負って緑化を行っている地元の人々とともに、雑草を抜かない実験を行うこととした。政府からの請負で植林を行っていたこの場所では、当初政府関係者や林業局から「植林地の雑草をぬけ」と厳しい圧力を受け、もし命令に従わない場合、資金援助を一切行わないなどの脅しを受けたが、彼らは「雑草を抜かない実験」を続けた。そのプロセスはまさに、「革命」と呼ぶにふさわしいものであった。それほどまでに「植林地の雑草は抜かなければならない」という絶対命令が貫徹していたからである。今回初めて「雑草を抜かない」試みを行ったことで、当事者も、政府関係者も、その自然の旺盛な回復力に驚いていた。

環境回復を目指しているはずの「植林」が黄土高原の多くの斜面で、土壌表皮を徹底破壊し、単一樹種を植え、本来の植生の回復を遅らせるという破壊作用をもたらしている。これほど単純な原理を、地元の人も林業局の人々も、そして黄土高原を訪れる外部の専門家も、見抜くことができず、営々と雑草を抜いて土壌表面をかく乱しつづける植林が続けてきた。これは人間の思い込みがもたらすいわば「呪縛」の作用である。我々は、こうした「呪縛」を取り払い、その土地本来の潜在力や回復力を活かすことで生態系が回復しうる、という考えのもとで、さまざまな社会的実験を行っている。